

北一輝と朝鮮人問題をめぐる覚書 ——松代大本営跡を訪れて——

恒木 健太郎

このたび、人文科学研究所の長野調査旅行（2019年2月26～27日）に参加させて頂いた。諏訪大社上社、松本旧開智学校、小布施岩松院・北斎館といった史跡・博物館などを回っていくこの旅行において、私がとくに関心を抱いたのは、アジア・太平洋戦争末期に時の体制が東京からの移転先として「国体護持」のために構築を図った松代大本営跡であった。

旧松代市街地からやや南にある、街並み保存に力を入れている閑静な住宅街。その中を通り抜けていった先の山裾に、かの松代大本営の象山地下壕入口はひっそりと有った。その佇まいは、本土決戦を覚悟せざるを得なくなった1944年夏以降の悲壮な状況下において突貫工事で作られたものとは思えないような静謐さを湛えていた。いや、その静謐さにはどこか安易な態度でその坑内に踏み込むことを拒絶するような、厳しく突き放す雰囲気さえ感じられた。

坑内は一部が公開されている。碁盤の目のように仕切られた坑道には、鑿岩機のノミの先が岩盤に突き刺さったままになっている箇所もあり、当時の工事の跡が生々しく残っている。長く真っ直ぐに伸びる薄暗い坑道は、まるでひたすら悪化していく終わりの見えない戦況を映じているかのようなようである。実際、松代大本営建設が行なわれた1944年11月から翌年8月の期間は、日本の敗北が何らの見通しももたない大本営のもとできわめて大きな犠牲を払いながら現実のものとなっていく過程とまさに平行であった。

この松代大本営の見学においては「松代大本営の保存をすすめる会」の方による解説も伺うことができた。それによれば、この地下壕工事の主力は、その全労働者のうち6割以上を占めた朝鮮人労働者であったとされる。この朝鮮人労働者が強制的に動員されたものだとする見解については、これを強く「批判」する意見もあるという。しかし〈強制か否か〉ということ以前に、来るべき本土決戦に向けてこうした「大本営」のみならず天皇や政府機関、さらには通信関連施設までも移転させようとしたこの計画に、日本の植民地支配下におかれていた朝鮮人たちが深く関わっていたという事実について、私はただふかく首を垂れるばかりであった。

* * *

現在の日本において、とくにネット上では排外主義（レイシズム）的な言動が横行している。その狭窄にもほどがある言動には、もはや狂気的としか思えない日本礼賛と朝鮮人蔑視が満ち溢れている。誰か不都合なことを起こす人間は「半島人」等の隠語で名指され、「日本人」と明

白に区別される。「日本人」はすべて清廉潔白であり、「半島人」の血が混じっている者はすべて「反日」的なるものとみなされるのである。

最近はこうした動きに官庁までが加担しているようである。今年2月28日には、「三・一独立運動百周年」において韓国への渡航者に注意喚起するスポット情報が外務省より出された(秋山 [2019])。日本人であるがためにデモに巻き込まれて襲われる恐れがあるから韓国には行くな、と言わんばかりの情報は、まさに悪化している日韓関係の象徴表現とでもいえるだろうか。しかし、ツイッターを見れば3月1日当日のソウルはいたって平穏だったとのこと。先述の韓国にかかわる海外安全情報を聞いて一笑にふす韓国人の方もおられたそうである(菅野[2019])。

いかに日韓関係が悪化しているといえども、それが即座に韓国の民衆による日本人排斥につながるわけではない。むしろ、この両者を短絡的に直結させた、ほぼデマといってもよいような情報を流した外務省こそ問題視されるべきではなからうか。この件には二つの深刻な事実が確認できる。それは、外交関係が悪化すれば即座にその相手国の民衆はみな自国の「敵」認定されると信じこむ、あまりにも非-知性的な条件反射が政府レベルにまで達している、ということである。「半島人=犯罪者」という偏見もさることながら、日韓関係が悪くなったので自分たち日本人は「半島人」をみな「敵」認定する、だから「半島人」も同じことをするはずだ、という思いこみがそこには透けてみえる。

私は、日韓関係が悪くなったからといって韓国・朝鮮に出自をもつ方々を敵視することはない。いかに国民性とやらが話題になろうとも、やはり個人は千差万別である。しかし、こうした当然と思われる前提が無視されて「〇〇人は犯罪者だから」などと要約する行為は、堀潤が批判した「大きい主語」で情報を流すこと以外の何物でもない。こうした「大きな主語」で流された情報は〈私はそのカテゴリーに入らないのに、勝手に一括りにするな〉という反発を多方面に生むだけである(堀 [2018] 112-117)。すなわち、これは確度の高い事実ではなく、デマ(フェイクニュース)にほぼ近いものになるだろう。

「〇〇人=犯罪者」という短絡的思考、その短絡的思考をみんなが同様にするはずだという自分ファーストの絶対主義、そしてその短絡的思考を強要する同調圧力。これらが事実の確定作業を阻害し、デマの温床となる。まさに1923年の関東大震災における朝鮮人虐殺は、そのことの典型だった。私たちはもっと歴史から謙虚に学ぶべきことがあるのではなからうか。ちなみに、堀潤によると日本史上最悪の「フェイクニュース」はアジア・太平洋戦争における「大本営発表」である(堀 [2018] 26-27)。「大きな主語」の情報に依存する姿勢の代償は、あまりにも大きすぎた多方面におよぶ犠牲であった。そうした歴史を、私たちはけっして忘れてはならないのである。

*

*

*

さて、こうした排外主義的言説を吐く者たちをしばしば「ネトウヨ」と呼ぶことがある。元々は「ネット右翼」の略称であるが、こうした「右翼」と聞くと歴史のなかで思い出す人物がいる。北一輝である。

北一輝と聞けば、まずは国家社会主義者ないし右翼の権化として危険思想扱いされがちな人物であるだろう。敗戦直後に設けられた戦争調査会の資料でも、軍部の政治介入を許した背景となる国粋主義・国家主義の台頭が問題視されていた。実際、1936年までにほぼ毎年のように国粋主義者ないし国家主義者によるテロが起きていた。血盟団事件、五・一五事件、神兵隊事件、天皇機関説排撃運動、そして二・二六事件である。当然ながら、そこで二・二六事件の首謀者であるとされて処刑された北一輝のことが重要視されることになる（井上 [2017] 83）。

井上寿一によれば、戦争調査会で北一輝にかんして重要な発言をしているのは渡辺鍬蔵（元東京帝国大学教授）であった。渡辺は戦争の起源を北が「国家改造案原理大綱」を執筆した1919年に求めた。周知のとおり、北の「大綱」は二・二六事件の首謀者たちに思想的な影響を及ぼしていたのみならず、直接的な影響もあった。実際に「反乱軍」からの暫定内閣主犯候補についての問い合わせに答え、その適任者に真崎甚三郎陸軍大将を指示している。その北の「大綱」が、外にたいしては陸海軍の大拡張によるシベリア、豪州、香港の奪取を、内にたいしては「其の妨害になる特権階級、財閥其の他」の排除を議論していた。このように理解していた渡辺にとって、戦争の原因は上述の軍拡路線と軍による権力独占の道を拓いた二・二六事件であった。そして、その直接的・思想的起源となった北一輝の「大綱」の執筆された1919年こそが、渡辺からすれば戦争の起源となるのである（井上 [2017] 136-137）。

上述のように、北一輝はしばしば先のアジア・太平洋戦争の背景となる暴力的国粋主義・国家主義の思想的起源として、また「大東亜共栄圏」という美名のもとで侵略戦争を行なうためのプランを提示した人物として悪評を受ける対象となってきた。戦争調査会の精選した資料においても、テロやクーデタによる国家革新の実現を目指した「非合法派」の黒幕は北一輝たちだとみなされていたし、その「非合法派」の引き起こした二・二六事件の評価をめぐっては、「軍首脳部はこれら青年将校のテロ行動を利用しつつ、元老、重臣、政府、財閥、政党、言論界を脅かし、順次その勢力を各界に伸ばしたことも決して否定出来ない」として、事件への陸軍の組織的関与が指摘されている。この見解どおりであれば、非合法派のクーデタが陸軍「合法派」の伸長に利用されたわけである。さらに、非合法派と合法派の権力闘争に象徴される国内政治社会の対立激化の間隙をぬうかのように現地軍による華北分離工作が実行されたせいで、1935年前半に修復されつつあった日中関係が一転して悪化することにもなっていた（井上

ま君民の水平的結合をうたい排外主義（レイシズム）とは距離をおいていた北一輝の思想が求められているのかもしれない。

*

*

*

しかし、北一輝の思想を同時代的にみる場合、必ずしもその内容が戦前日本において反時代的かつ先見の明に満ちたものだったと無垢に評価しうるのかどうかは、相当に慎重な留保が伴わざるを得ないようにも思う。それは北が二・二六事件というテロないしくーデータの極致の首謀者だったと認定するからではない。

そもそも、北一輝や彼に共鳴した青年将校たちの思いを評価する向きはかつてからあった。戦後民主主義の代表格としてその「近代主義」の進歩性を高く評価されてきたはずの西洋史学の泰斗たる大塚久雄こそが、他ならぬその人であった。彼は安保闘争かまびすしき頃の上山春平との対談において、1959年に単行本として刊行された武田泰淳『貴族の階段』（武田 [1959=2000]）に触れつつ「農民層の問題を自分たちの問題と捉えて」いた青年将校たちに共感するような発言をしている（大塚 [1960=1968] 380-381）。

農民には軍隊に入る以外の立身出世の道が断たれている。そこで軍隊に入った者たちの希望は「安逸をむさぼっている」上層部の「悪い奴」を放逐し、自分たちの「代表者」を探すことである。そこにおいて「規制勢力は、たよるに足りない」。そうした思いのなかに、大塚は戦前から戦後へと続くような何らかの構造変革の「主体性」を見つけ出そうとしていた。そして、この「農民層の問題」を把握しうる理論的枠組を有していたというかぎりにおいて、大塚は北や青年将校をナチスとともに評価していたのだった（恒木 [2013] 273-277）。

ゆえに、先述のような北一輝への接近は同時に「貧困救済の正義のためであれば、暴力性を伴った革命もやむなし」というような思想との関係が問われねばならないはずである。それは必ずしも物理的暴力を伴うとはかぎらないが、垂直統合型を志向する上層部やそれに依存しているネトウヨにたいして圧倒的な力をもって制圧する、というような過激さをもって現れることを良しとするのかどうかまで問われてくるはずである。

また、北による君民の水平的結合の思想や朝鮮人に対する配慮を示した言説の意義については、井上寿一による以下のような指摘があることを念頭におく必要がある。日本はナチス・ドイツを模範国として受け入れる土壌があった。そこには「ヒトラーの下での平等」にもとづく格差是正の思想があった。しかし、すべてをナチス・ドイツと同じにはできなかった。ユダヤ人を排除しアリア民族の優秀性を唱えるナチスと同じことは不可能だった。すでに台湾を領有し韓国を併合している日本は、現実には多民族国家であった。そのうえ、満洲事変以降の日本が満洲国において「五族協和」を掲げ、日中満を中心とした「東亜協同体」をめざす立場にあっ

危機感はまさしく戦争の現場へと送られる自衛隊員とともに共有されねばならない。自らの言説が自衛隊員への蔑視を伴っていると受け取られるようなものになっていないか、「安保関連法案」を成立させた安倍政権にたいする批判を事とする人々は十分に留意する必要がある。さもなくば、本当に「いつか来た道」へと戻ることになりかねない。井上の議論はそうした警告を暗に組み込んでいるようにも思われる。

* * *

戦争にいたる道で模範国ナチス・ドイツのなかにみた格差是正の夢は、戦争の遂行によって実現された。地主対農民、資本家対労働者、男性対女性、都市対農村、これらの間の格差は、確実に縮まった。戦時下の食料確保のための政府による生産者米価の引き上げは、農家の収入を増加させた。男子を戦場に送りこんだことにもなう労働力不足は、賃金の職種間格差や企業規模格差の大幅な縮小をもたらしたし、男女間の賃金格差も縮小させた。そして、空襲による都市への壊滅的打撃は、相対的に農村・漁村の地位を上昇させ、都市と農村・漁村との格差を縮小させた。

しかし、この格差是正は、急速に悪化する戦局におけるかぎられた富の再分配、すなわち下方平準化であった。しかもその平等は不徹底であり、学歴や身分などの階層差別はなくならなかった。真珠湾攻撃を行なった東條英機政権における最前線行きとの者と安全な場所にいられる者との区別は、その憲兵政治の極致であった。要するに、暗黙のうちの恣意的な人事権行使が国民に不平等感をうみ、モラル（道徳）とモラール（士気）の腐食をもたらすようになった。そこから東條政権の崩壊（1944年7月）はあと一步である。しかし、その後「終戦」にいたるまでには、沖縄戦の敗北、広島への原爆投下、ソ連の対日参戦、長崎への原爆投下、これだけの犠牲を払わなくてはならなかった。そこまで行き着かなければ、降伏の意思は固まらなかったのである（井上 [2011] 225-229）。

アジア・太平洋戦争末期の日本にかんするこの叙述を「おわりに」とし、井上寿一が『戦前昭和の社会 1926-1945』の「あとがき」を記したのは2011年2月のことである。本書が出たのは、3・11の直後であった。その後、日本において何が起き、いまだどのようなことが起きているか。そのことを脳裏に浮かべるだけで、私は眩暈がしてくる。いちいちこの時期の状況と3・11以後の日本との共通点を指摘することは控えるが、私たちは本書に記されたアジア・太平洋戦争の結末について、よりいっそう強い関心をもって謙虚に学ぼうとする姿勢が求められているといえるだろう。

松代大本宮の象山地下壕内は厳しい暗闇であった。しかし、そこからの出口は、もと来た入口にある。その入口を出口として引き返せば、明るい世界へと戻ることができる。私たちにい

ま必要なことは、ひたすら前へと突き進み破滅することではない。歴史というもと来た場所へと引き返して立ち止まり、過去から明るい世界を取り戻すための方策をみつけようとする慎重さと勇気ではないのか。松代大本營の象山地下壕の静謐さが私たちに突きつけるものは、そうした歴史というものの耐えがたくも耐えねばならぬ重みである。

参考文献

- 秋山信一 [2019] 「外務省、韓国『3・1』でデモ注意呼びかけ——日韓関係悪化踏まえ」毎日新聞<<https://mainichi.jp/articles/20190228/k00/00m/030/144000c>>2019年3月17日閲覧
- 井上寿一 [2017] 『戦争調査会——幻の政府文書を読み解く』講談社現代新書
- ——— [2011] 『戦前昭和の社会 1926-1945』講談社現代新書
- 大塚久雄 [1960=1968] 「危機の診断——〈ネイション〉を捉えるものは誰か」『大塚久雄著作集 第6巻 国民経済』岩波書店（1968年）375-393
- 白井聡 [2018] 『国体論——菊と星条旗』集英社新書
- 菅野朋子 [2019] 「三・一独立運動記念日 現地記者が感じた、リアルな韓国人の関心の先——文在寅大統領が立たされた苦境」文春オンライン<<https://bunshun.jp/articles/-/10957>>2019年3月17日閲覧
- 武田泰淳 [1959=2000] 『貴族の階段』岩波現代文庫
- 恒木健太郎 [2018] 「『戦中史』と『国体論』を貫くもの」『専修大学社会科学研究所月報』666, 1-13
- ——— [2013] 『「思想」としての大塚史学——戦後啓蒙と日本現代史』新泉社
- 福井紳一 [2018a] 『戦中史』角川書店
- ——— [2018b] 「『戦中史』における『国体』と天皇制」『専修大学社会科学研究所月報』666, 14-27
- 堀潤 [2018] 『SNS で一目置かれる堀潤の伝える人になろう講座』朝日新聞出版